

補助事業こそ「命」

「補助」事業という表現が、個人的にはあまり好きではありません。辞書によれば「足りないところを補って、助ける」とありますが、何となく「補助を受ける」側に対する、「補助する」側の目線の高さ、上からの視線を感じるからです。とは言え、変わるべき適切な言葉も見当たらないので、このまま使いますが、競輪・オートレースにおける補助事業とは、JKAと補助先とが一体となって行う社会貢献活動であると、私は考えています。

外形的に見れば、競輪・オートレースが刑法の禁止する「賭博罪」に該当することは、誰の目にも明らかです。その点は競馬、競艇も同じなのですが、それが社会的に許されるのは、競輪の場合でいえば、自転車競技法が「自転車その他の機械の改良……並びに体育事業その他の公益の増進を目的とする事業の振興に寄与するとともに、地方財政の健全化を図る」という目的のためなら、自転車競走⇨競輪を実施してよいと定めているからです。要は補助事業によって

社会的に貢献すること、地方財政に寄与することを条件に、本質的には賭博である競輪の違法性がなくなるということなのです。

このことからすれば競輪・オートレースにおける補助事業とは、競輪・オートレースの社会的正当性を担保するものであり、競輪・オートレースに付随して行われる「付録」ではなく、競輪・オートレースの「命」そのものなのだと思います。補助に使われるお金はJKAのものではありません。車券を買ってくださったお客様から一時預かっているという性格のものであります。それをできるだけ有効に、効率的に使っていただけるよう、補助先の諸団体と共同歩調で、着実に進みたいと考えています。競輪・オートレース事業の収益悪化に悩む競輪・オートレース施行者・自治体首長の中には「(補助金の原資である)JKAへの交付金を減らせ」との声も一部にあるようですが、「命」である補助事業はこれからも守り、育てていこうとの決意と信念は、JKA職員共通のものであります。

財団法人JKA会長 石黒克巳

目次

会長エッセイ	2
補助事業について&補助事業の仕組み	4
機械工業振興補助事業とは	5
リングリングプロジェクトを訪ねて	
一般財団法人 造水促進センター	6
一般財団法人 エンジニアリング協会	7
早稲田大学大学院情報生産システム研究科	8
地方独立行政法人 岩手県工業技術センター	9
公益事業振興補助事業とは	11
リングリングプロジェクトを訪ねて	
公益財団法人 日本障害者スポーツ協会	12
NPO法人 チャイルドライン支援センター	14
公益財団法人 がん研究会	16
公益財団法人 高知県総合保健協会	17
大河原町立金ヶ瀬中学校	18
袖ヶ浦市立根形中学校	19
NPO法人 地・LOHAS推進会議	22
東日本大震災復興支援補助採択状況一覧	23
競輪選手が訪ねた補助事業	
一般財団法人 九州産業技術センター	24
社会福祉法人 静岡福祉事業協会	25
ホームページ紹介	26
お問い合わせ先	27

JKAの補助事業

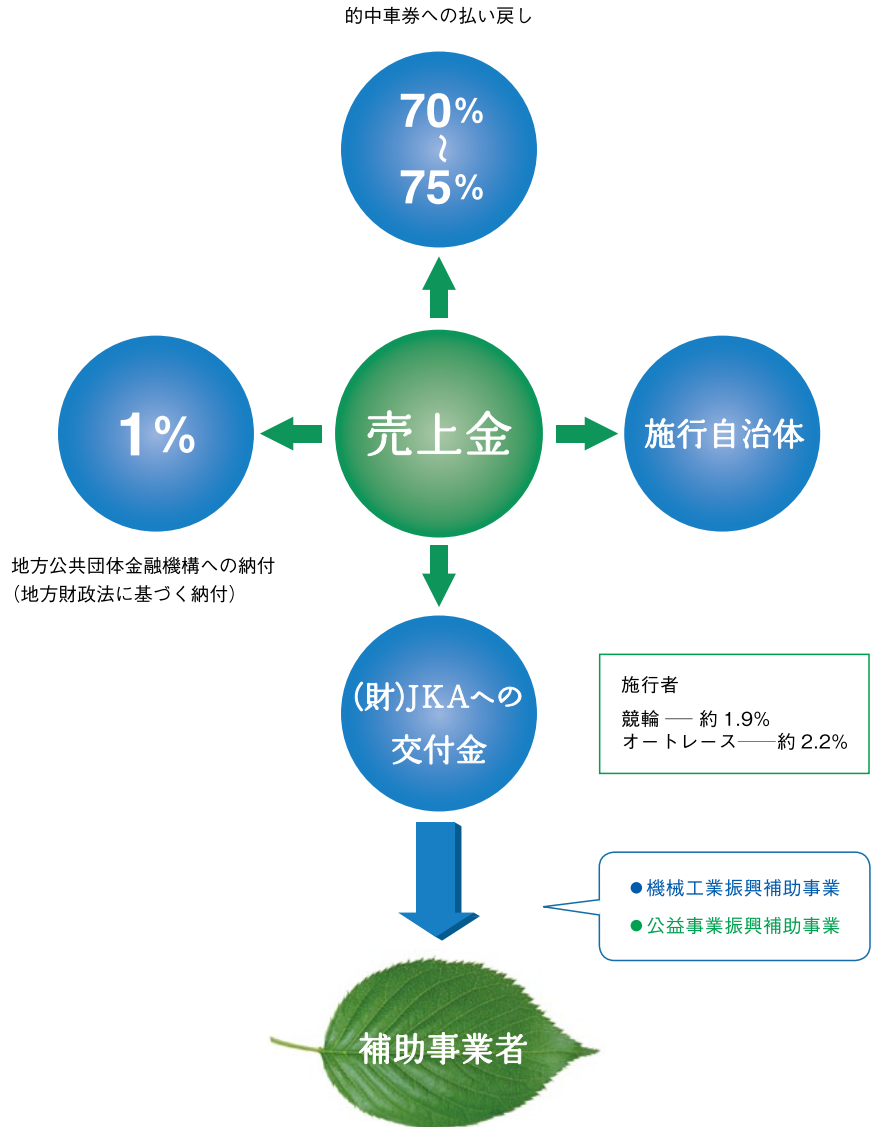
本財団は、地方自治体が施行する競輪・オートレースの売り上げの一部を広く社会還元するため、機械工業の振興並びに社会福祉等公益増進に関して、「チャレンジ」「チェンジ」をキーワードに、以下の補助事業を支援します。

機械工業分野については、「機械工業の基盤を支える地域産業」「ものづくり産業の振興」「産業活力を高める新たな価値の創造」、それらを促進する活動などを支援します。

公益振興分野については、「子ども、高齢者、障害者の社会参加」「地域社会と人との関わりの中で、つながりを築く取り組み、生きがいを高められる活動」、それらを促進する活動などを支援します。また、東日本大震災の復興については、息の長い支援が求められることから、今後とも震災復興を支援します。

両分野共に、さまざまな社会的課題を解決するため「将来の社会的ニーズの先駆的な取り組み」「新たな社会的課題に挑戦する取り組み」を積極的に支援します。

補助事業の仕組み



機械工業における先駆的な取り組みを応援しています。

機械工業

振興補助事業

- 安全・安心、人命事故に関する取り組み支援
 - 公設工業試験研究所等の機器整備支援
 - 地域の中堅・中小企業の振興
 - 研究者の自由な発想による意欲的な研究
- 地方自治体が開催する競輪・オートレースの売上金の一部は、機械工業の発展に大きな役割を果たしております。

世界中で不足する水を再利用 飲むにはきれいすぎる水もできます



造水促進センターの技術を使ったサウジアラビアの海水淡水化装置

近年、人口増加や経済社会の発展、地球温暖化などに伴い、世界中で深刻な水不足が懸念されている。

造水促進センターは、昭和40年代、捨てられている工場廃水を、きれいに工業用水として再利用する技術開発のために設立された。その後、海水の淡水化も手掛け、「逆浸透膜」を利用する技術の実用化に成功、その普及啓発にあたっている。現在では、世界中の水処理装置に使う膜は、日本のメーカーが、シェア6割を誇るといえる。

「逆浸透膜」とは、水の分子は透過するがイオンや塩類などは通さない、ごく小さな孔が一面にあいた化学材料の膜。この膜で塩類濃度の高い水と低い水を仕切り、高い側に圧力をかけると、低い側に不純物が取り除かれた水が出てくる。

海水を安定的に大量に淡水化することができ、日本では日量五万トン、中東などでは数十万トンの能力を持つプラントもできている。作ろうと思えば、純度が高くきれいすぎて、飲んでもおおいくないほどの水もつくれるという。

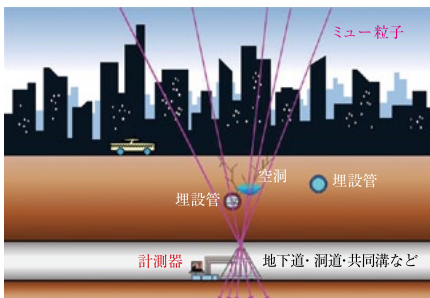
さらに、造水促進センターでは、JKAの支援を受けながら、使用済みの膜を利用し、低いコストで下水を再生処理する実験をしている。これらは、うまくいけば地域経済の活性化にもつながると期待されている。(季刊誌「V.O.I.」16秋号より抜粋)

宇宙線「ミュー粒子」使い空洞探査 地盤の安全安心を掘らずに確保

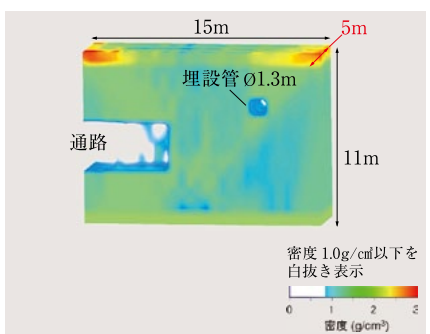
例えば、下水管の陥没事故は、東京都内で年間約1400件も起きる。地面の下に空洞ができ、道路が陥没したり地盤が沈下したりする事故は、都市インフラの老朽化とともに、まれとは言いがたくなっている。そこで、地面を掘り返さずに、地中の状態を知ろうとするのが、一般財団法人・エンジニアリング協会が開発した「ミュー粒子を応用した地盤危険性探査技術」。宇宙から降ってくる素粒

子の一種「ミュー粒子」が、地盤を突き抜ける個数を、地点と角度を変えて計測し、そのデータを解析して、空洞がないか、密度がどうなっているかなど地下の状態を探索する。地中レーダーや電気探査、地震動探査などに比べ、自動車や工場、送電線などのノイズを受けず、従来の方法では探査しにくい深さの領域が調べられるのが特徴。23年度には、地下環境での機器の動作確認やシステム構築

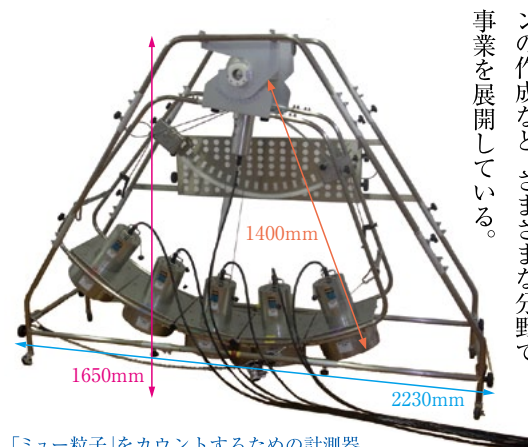
を行い、ほぼ実用化段階に達した。水力発電所の水路上の空洞探査を受託した例もあるという。同協会は、会員企業や研究者と協同で、最新技術を組み合わせた複雑なシステムの開発・構築を推進しており、JKAの補助を受け、地盤探査技術開発のほか、プラント配管の維持管理ガイドラインの作成など、さまざまな分野で事業を展開している。



宇宙線「ミュー粒子」を利用した空洞探査イメージ



解析結果。地下通路と下水管がとらえられている



「ミュー粒子」をカウントするための計測器

ロボット追いかけて「しっぽ踏み」 ゲーム感覚で楽しくリハビリを



床に投影された猫の尻尾を踏むと猫の鳴き声がする

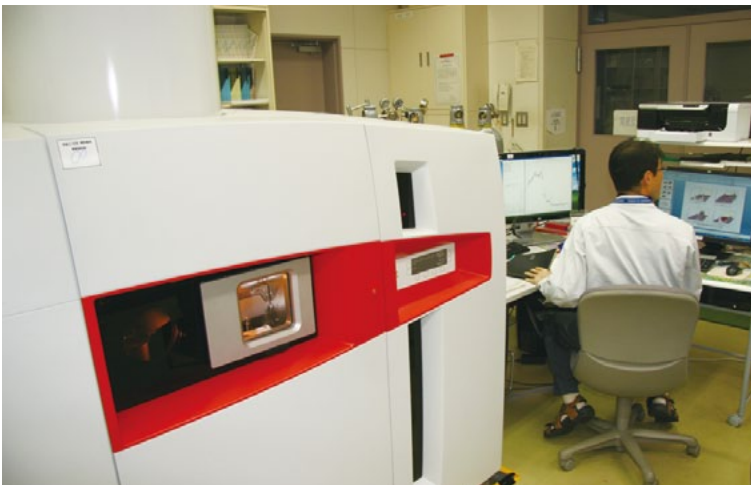
ロボットの移動につれ、床に投影されたしっぽが、揺れながら逃げてゆく。追いかけてしっぽを踏みつけると、ディスプレイに犬の怒った顔が現れ、ワンワンと鳴き声が響く。本物でそんなことをしたら、動物虐待だが、ロボット相手なので、ゲーム感覚で楽しめる。しっぽを追いかけるうちに、高齢者や障がいを持つ人の、認知・判断能力、運動機能の回復強化が望める。単調で億劫になりがちなりハビリが楽しくなる。

ステップ・オン・インターフェイスと呼ばれるこのロボットは、主に床に映像を投影するプロジェクター、靴の位置や動きを検出するセンサー、それらを統合するパソコンのコントローラーでできている。床の映像が操作パネルの代わり、足や杖でロボットを動かせる。図や記号を使えば、母国語以外の人にも、動作を理解してもらえる。

開発した早稲田大学大学院情報生産システム研究科の松丸隆文教授は、人と接する機械を親しみやすく、使いやすくする研究を深めてきた。「開発には、人間工学、生体工学、心理学などあらゆる知識を総動員しています」という。研究室は、中国、台湾、インドネシアからの留学生で、国際色豊か。

(季刊誌へたるV.O. 19夏号より抜粋)

地場産業の伝統技術の蓄積 デザインや表面加工に生かす



JKAの補助で導入されたエスカ表面解析装置。コールドスプレーで作った薄膜の分析ができる

明治6(1873)年に岩手県勧業試験場として発足、工業技術系試験場としては、全国最古級の歴史を誇る。南部藩時代からの地場産業、南部鉄器や南部杜氏、蚕糸や漆などの技術を、現代の製品づくりに生かす地域性豊かな試みが特長だ。

例えば、南部鉄器の製造法から製品の表面処理技術を高め、車の発泡樹脂成型部品の質を向上させた。これを県下の中小企業に移転し、トヨタのような大企業が東北へ進出する下地をつくった。

南部鉄器の素材の性質を生かす伝統的意匠感覚は、木工品や陶磁器にも生かされ、福祉食器シリーズ「てまる」を生み出した。緑の角度の微妙な工夫で、手先が不自由なお年寄りでも食べやすい食器は地域の工房で製品化され、介護施設で利用されている。

南部杜氏の伝統からは、新しい日本酒の酵母の開発研究、地域の繭や漆を扱う技術からは、新しいジュエリー作りが進んでいる。



ユニバーサルデザインの食器シリーズ「てまる」。緑が内側へカーブし、スプーンですくいやすい



東日本大震災に際しては、400社近くからニーズの調査をし、被災企業の装置の洗浄など、さまざまな支援を行い、県内企業の復興を支えた。(季刊誌へたるV.O. 18春号より抜粋)



リングリングプロジェクトを訪ねて

人にやさしい社会を作る公益事業を応援しています。

公益事業

振興補助事業

- 自転車、モーターサイクル、文教、社会環境、国際交流、体育スポーツ、医療、公衆衛生など公益の増進
 - 東日本大震災の復興支援
 - 児童、高齢者、障害者のための社会福祉の増進及び車両整備
 - 青少年の健全な成長を育む活動、人間力育成支援
- 活動地方自治体が開催する競輪オートレースの売上金の一部は、社会生活の向上に大きな役割を果たしております。

その他の補助先紹介・研究補助



ファインセラミックスに関する国際標準化の推進

ファインセラミックスのISO規格(国際規格)の標準化を図り、国内関連産業の発展を推進する活動を行っています。

一般社団法人 日本ファインセラミックス協会



中国地方のものづくり支援

「電子デバイス事業化フォーラム」等の産業創出講演会を定期的に開催し、中国地域の機械工業におけるものづくりを支援するための活動を行っています。

公益財団法人 ちゅうごく産業創造センター



公設工業試験研究所の設備拡充

「ナノ金属組織解析システム」など、地域企業が購入することが難しい測定装置や検査機器を導入。依頼に基づき職員が検査・測定することで製品の品質向上に貢献、地域企業をサポートしています。

福岡県工業技術センター 機械電子研究所



電動自転車の環境適応型安心安全支援制御器の研究

人の操作力と自動制御(支援制御)の融合をはかり、その融合の実現に適切な制御器の構造を提示。自転車だけではなく人の動作支援機器への応用の可能性も示しました。

慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科



低圧縮比による小型ディーゼル機関の二輪車への適応に関する研究

二輪車から排出される二酸化炭素を削減するため、軽油よりも着火性が良いバイオディーゼル燃料によってディーゼル機関を二輪車に適応する実証研究を行っています。

日本大学理工学部機械工学科



全日本代表としてプレーする京谷選手
(日本車椅子バスケットボール連盟提供)

フロントランナーに聞く

車椅子バスケットボール
パラリンピック代表
京谷和幸選手(41)

今回ロンドンに派遣されるパラリンピック日本選手団は17競技、135人(7月18日現在)。「車椅子の格闘技」と言われる人気種目の代表チームメンバー中、最年長にして4度目の出場、チームの精神的支柱として「最後の大会で完全燃焼を」と言い切る障害者スポーツのフロントランナーに、胸中を語ってもらった。

高校サッカーのエリートで、サッカーJリーグ発足時のホープ。結婚式を目前にした22歳の人生航路は、不運な交通事故故で一転した。車椅子の生活を承知の上で結ばれた妻と二人三脚で、障害という「未知の世界」から、二つ目の競技でトップ選手に上り詰めた軌跡は、これまでコミックや映画でも紹介された。競技生活は、すでにサッカーのキャリアを超える18年。

「目の前にあること

一歩一歩 未知の世界から登り続けた

を一つ、また一つやってみる。自信は、そこから自然に生まれてくるんです。暗闇の中からも、出来ることを全力でやれば、なにかの明かりが見えてくる……」

「障害者がいきなり車いすに乗っても、シュートやパスの技術以前に、片手で車輪をコントロールしながらボールを保持するだけでも困難、と言われる。胸椎損傷による腹筋・背筋力の喪失と下半身麻痺の状態から、「これまで乗り越えてきたものや、トレーニングの蓄積は誰にも負けない」という自負はある。でも「障害者だから頑張った、と思われたくはない」。それはアスリートとして、一人前になるためにはらった努力。今の自分は「パラリンピアン」というプロフェッショナル、と言えるかもしれません。」

「障害を持った人が観戦したときの目の輝きを見ると、スポーツに親しむ機会がもっとあれば、と思います。まず設備を、と言う発想ではなくて、ハンデイを持った個々の人を主人公にした、具体的な補助を考えてほしい」

「ハード」の前に人。さまざまな出会いに恵まれての今の自分、と過去を振り返っての実感だろう。



ブラインドサッカー競技の攻防



義足のプレーヤーが走る自転車競技

オリンピックイヤーの今年は、障害者スポーツの最高峰・パラリンピック大会が、五輪と同じロンドンで開かれる。1964年、東京五輪と同日開催されたパラリンピック大会に刺激を受け、国内の障害者スポーツ振興のために発足した統括組織が「日本障害者スポーツ協会」だ。用具やルールを工夫して創出された障害者競技は、高度な専門性や独自の面白さを備え、今では健常者の種目と並ぶスポーツの一部、と位置付けられるようになった。現在協会には、身体障害、視聴覚障害、知



障害者の社会参加の促進を目標とする「全国障害者スポーツ大会」

右ページの写真はすべて X-1 提供

電話にあふれる心の痛み 被災地の子らに寄り添い支える

チャイルドラインは、18歳までの子どもの、心にたまった訴えを受け止め専用電話だ。現在、44都道府県74団体が共通のフリーダイヤル(0120・99・7777)でネットワークを組み、全国からの声に耳を澄ませる。電話の受け手は、子育てが一段落した主婦、定年後の男性、学生など、それぞれの地域で研修を受けたボランティア約2300人。毎日5時間の受け付けで、着信数は1日当たり600件を超える。



2011年3月11日の東日本大震災後、被災地からの電話には、自分の力ではどうしようもない、子どもたちの心の痛みがあふれた。

「一人でいるのが怖い」「眠れない」「つらい、自分も死ねばよかった」……時がたつにつれ、「着替える場所がない」「泣き声やけんかしている声で、ゆっくり寝られない」など、気持ちさがさくれ立つ避難生活のつらさもうかがえた。

「テレビの取材などで、明るく健気に振る舞っている子どもの姿がありました。でも実際は、極度の緊張で感情が抑圧され、泣くこともできなかったと思います」。全国のチャイルドラインのネットワークをまと

める、東京の支援センター事務局長・太田久美さんは、報道では伝わらない被災地の心の闇を気づかう。

チャイルドライン開設のきっかけは、1990年代のいじめの顕在化だった。



電話に耳を澄ますチャイルドラインのスタッフ

子どもの不満や怒りを受け止め、寄り添っていく手立てが必要ではないかと、ヨーロッパの先例を学んだ市民団体が呼びかけ、現在では超党派の国会議員連盟、企業、団体、行政などの幅広い支援を得て運営されている。

毎夕午後4時、各地のチャイルドラインの電話が鳴り出す。スタッフが受話器を取って、静かに語りかける。

「どんな話でもいいよ」「ゆっくりでいいですよ」太田さんによれば、受話器の向こうの子どものうちの多くは、大人の競争社会に放り出されて疲れ切り、自信を失っている、という。「こんなに頑張っているのに、なんで認めてくれないんだ、と怒りを沸々とさせている子もいる。怒りが絶望につながるらないか、とても心配になります」。

「秘密は守る」「どんなことでも、一緒に考えよう」「名前は言わなくてもいい」そして「切りたい時には切っていい」が約束。こうしたら、と解決策を示すことが目的ではない。「子どもが自分の心を整理する手助け」にとどめ、子ども自身が見つける答えを尊重する。

「相手の言葉を決して否定しないこと。でもそれは、鵜呑みにすることではありません。あれ？と思う事は、どうして？と問い返す。それが、誠実なコミュニケーションだと思います」。太田さんの言葉は、液晶画面ばかりを見つめている現代人すべてにとって、他人事ではなさそうだ。



基礎研究と臨床を一体化 日本発のがん治療薬開発に挑む

日本におけるがん研究機関の草分け。基礎的研究部門であるがん研究所・がん化学療法センターと、診療と臨床研究を行うがん研有明病院が一体となった組織で、豊富な患者情報と資料を蓄積して研究を進める。医薬品の輸入超過が急増する現状に対し、日本発のがん治療薬の開発にも取り組む。

例えば、近年開発中の新薬「ZSKT474」は、異常を起こすと発がんやがんの増殖促進の要因になる「P13キナーゼ」という酵素の働きを妨げる。基礎研究段階では抗がん作用が認められ、アメリカ食品医薬品局の審査を経て臨床試験が始まった。経口投与で有効性を持ち、毒性が低く、放射線療法と併用することで治療効果が高まるという。

23年度JKAの補助で導入された「パーソナルマイクロアレイシステム」などの機器は、「ZSKT474」の作用を遺伝子レベルで解析する際に役立つ。がん研究はどのような遺伝子に、

どのように傷がつき、どのように細胞が異常になるかについて理解が進み、治療の標的となる遺伝子が絞られてきた段階。異常になった遺伝子の働きをピンポイントで攻撃する「ZSKT474」のような「分子標的薬」が、抗がん剤開発の最新の流れになっている。

多種多様で変わり身が早いがんの治療を進めるため、さらなる分子標的薬の開発が期待されている。



がん研有明病院の外観



パーソナルマイクロアレイシステム。
がんなどによる遺伝子の働きの変化を解析する

公益事業振興

公益財団法人 高知県総合保健協会

車いすごとデジタル診断 県内初のリフト付き検診車

公益財団法人・高知県総合保健協会では、JKAの補助を受け、今年2月、身障者用胸部デジタル検診車を導入した。県内では初のリフト付き検診車で、車いすごと中に入れるため、足の不自由な人も、安心して検査を受けられるようになった。また、デジタル方式の装置を搭載し、その場で画像を処理・確認できるため、不良画像が出にくい。データのコンピューター管理により、過去の検査との比較もやりやすく、画像の拡大や濃度の調整、また白黒の反転も可能なので、受診者の被ばく量も少ないなどの利点がある。

同協会は、県内の住民検診、学校検診、職域検診の大部分を受け持っており、検診車は要請があれば、どこでも無料出張が原則。特別養護老人ホームや山間部の過疎地などに出向き、少数から多いときは500人近い検診を行うこともある。現在、高知県では、胸部疾患のうち、結核患者数は横ばい

状態だが、肺がんは、がんの中の死亡率1位となっているという。

JKAでは最近6年間で、全国にリフト付き検診車をはじめとする各種検診車175台、30億円相当の補助をしてきた。福祉車両は6年間で1458台、25億円相当、児童養護・高齢者・障害者対応施設の建築補助は90億円にのぼっている。



特性リフト付きで足の不自由な人も車いすごと受診できる



高知県総合保健協会の胸部デジタル検診車

梅干し、米、手作りで備蓄 食の体験授業で「自助」の防災



昔ながらの手作業で農作業体験授業

宮城県仙台市の南西、仙南地域の中心にある大河原町。東北大震災では死者が出るような大きな被害は免れたが、ライフラインの途絶で、多くの町民が一時、避難生活を余儀なくされた。生徒、先生、保護者、それぞれの身にしみた体験を通して、防災対策の見直しを行ったのが、町立金ヶ瀬中学だ。

手始めに、避難所になっていた公民館の片づけや、津波で壊滅的な被害を受けた近くの亘理町の学校の復旧作業に生徒・教職員・保護者らが参加。校内の備えとして、炊き出し用の大鍋、プロパンボンベ、ガスコンロ、米などの資材を倉庫に用意し、防災用品の製作を授業に組み込んだ。

古くからの金ヶ瀬名産、梅干し作りもその一つ。生徒たちが近くの梅林で梅の実を摘み、選別から天日干しまで地域の梅干し名人に教わり、一部を非常食として校内で保存している。備蓄米も、生徒の農作業体験授業の収穫だ。昔ながらの手作業で田植え、稲刈り、はせがけでの天日干しを行い、昨秋の収量は、1反から(約9・9㍓)



金ヶ瀬伝統の梅干作り

約300キロ余り。校庭の花壇も、野菜畑に変わった。

校長の鈴木秀典先生によれば、「避難所で最低3日食べていければ」が、震災時の実感という。個人も地域も、暮らしの中で「自助」の力が問われている。

(季刊誌「だる」Vol.18 番号より抜粋)

新世紀未来創造プロジェクト

袖ヶ浦市立根形中学校

地域が応援 郷土の農を学ぶ 畑仕事の授業 大人と協同で

房総半島・内房のほぼ真ん中に位置する千葉県袖ヶ浦市。首都圏の衛星都市化が急速に進んでいるが、内陸に向かうバスは、5分も走れば濃い緑に包まれる。その一角にある市立根形中学校では、2年前からJKAの補助を得て地元特産



農作業はボランティアの大人とっしょに

の落花生と生花の栽培を、技術科の授業に取り入れている。

授業では、まず生産農家が袖ヶ浦の農業の現状を解説し、近所の農家から借りた畑で、土おこし、苗の植え付けから収穫まで、節目ごとに実習

を行う。1クラス

20人余の小学生4、

5人に1人の

割合で、地域

住民で作る学

校支援ボラン

ティア組織の

メンバーが付き

添う。授業の協

同作業は、大

人と子供たち

が「顔のわかる

関係」を結ぶ



まず初めに、地元の農業の現状を学ぶ

場にもなっている。

全生徒世帯のうち農家は1〜2割、実際に作業を担っているのは祖父父母の世代だが「そばで見ているせいか、体や手は自然に動きますね」と、技術科担当の白井隆太先生。休み時間などに畑の草取りをしていると、いつの間にか生徒たちが集まって手を動かしているという。

収穫した落花生は、毎年秋の市のお祭り会場で、JA販売所の一角を借りて配布。無料とあって、本職の農家の産品の「良きライバル」になっているそうだ。

その他の公益事業

文化財の保護活動

トルコ共和国カマン・カレホック遺跡調査を基盤とするフィールドコースを開催し、文化財の保護と若手研究者の育成に取り組んでいます。
財団法人 中近東文化センター



消費者トラブルの防止

東京と大阪で電話相談による「なんでも110番」を開催し、消費者トラブルの解決に取り組んでいます。
公益社団法人 日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会



地域に伝わる伝統文化の継承と地域交流

地域に伝わる和太鼓演奏を継承し、地域の老人福祉施設で披露することにより、地域のひととの交流活動を行っています。
安中市立細野小学校

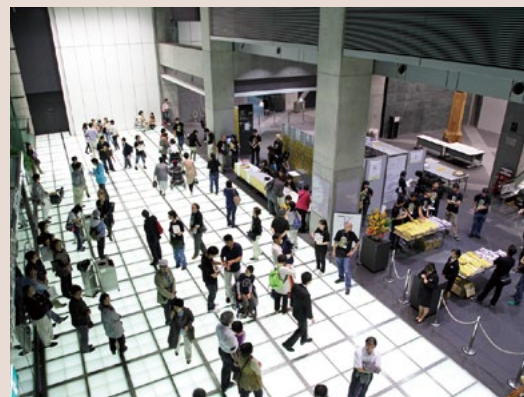
「富山の史実朗読劇プロジェクト」活動

学校単位の指導ではなく、複数の学校の生徒や一般の人々と合同で学ぶ機会として、地元の高校生による朗読劇を催しました。
NPO法人 F-site



高齢者の健康増進

介護予防教室を定期的に開催し、高齢者が楽しみながら健康を増進する活動を行っています。
社会福祉法人 パール



撮影/大高英樹

ゴールドコンサートの開催

音楽を通して障がい者の自立と社会参加を目的として、障がいを持つミュージシャンを対象とした音楽コンテストを開催しています。
NPO法人 日本バリアフリー協会



みんなで育てる花プロジェクト

子どもたちが、地域の方々とともに花苗を育てる「みんなで育てる花プロジェクト」を通じ、他人を思いやる優しい心、地域を愛する心を育むことによって、より地域に開かれた学校づくりにつなげられる活動を行っています。
豊中市立大池小学校

大堀相馬焼320年の伝統復活へ 避難先でイヤープレート作り

大堀相馬焼は、福島県浪江町大堀地区で320年以上の伝統を誇る焼き物。青みがかった緑の肌と細かいひび、馬の絵付け、二重焼きの構造が特徴。二十数軒の窯元が、農業の傍ら焼き物作りに励む「半農半陶」生活をおくっていた。それが暗転したのが、東日本大震災と原発事故。20キロ圏内の警戒区域に入っていたため、窯元は福島県内に8軒が避難、他は県外に散り散りになった。そのうえ放射性物質が、大堀地区の粘土や釉薬の材料を汚染し、320年の伝統が途切れる危機に瀕した。

「愚痴を言ってもしょうがない。とにかく組合員に仕事を作らなければ」。復興へ向けた第一歩として、大堀相馬焼協同組合理事長・半谷秀辰さんは、避難先の二本松市の工業団地に土地建物を借り、組合員が交代で利用する窯を設置した。初仕事は、名物B級グルメ「浪江やきそば」を盛るためのイヤープレート700枚

を焼くこと。大堀相馬焼の戦略的展開支援をしている仙台のNPO「地・LOHAS推進会議」とともに、7月に復興イベントを開き、浪江町民にイヤープレートを抽選で配った。「いつ帰れるかわからないが、和を大切にして伝統を守りたい」と半谷さん。

(季刊誌「だる」Vol.19夏号より抜粋)



走り駒の絵が美しい大堀相馬焼の湯のみと皿

平成23年度東日本大震災復興支援補助採択状況一覧

事業名	要望		採択		採択率			
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額		
23年度(第1次募集)	支援拠点づくり	13	34,785	4	11,206	31%	32%	
	被災者に対するカウンセリング、調査活動	25	71,777	12	33,841	48%	47%	
	被災地の記録、調査活動	22	61,882	13	36,914	59%	60%	
	被災者や被災地域が自ら行う活動	13	34,501	7	17,968	54%	52%	
	第1次募集 計	73	202,945	36	99,929	49%	49%	
23年度(第2次募集)	第1回締切分	支援拠点づくり	6	17,966	2	6,000	33%	33%
		生活支援活動	14	35,586	4	8,284	29%	23%
		被災地の記録、調査活動	15	35,354	3	5,745	20%	16%
		復興活動	13	38,869	3	8,887	23%	23%
	計	48	127,775	12	28,916	25%	23%	
	第2回締切分	支援拠点づくり	6	15,448	3	5,718	50%	37%
		生活支援活動	10	22,392	0	0	0%	0%
		被災地の記録、調査活動	4	10,232	2	4,032	50%	39%
		復興活動	11	28,521	2	5,189	18%	18%
		計	31	76,593	7	14,939	23%	20%
第2次募集 計		79	204,368	19	43,855	24%	22%	
23年度 計	152	407,313	55	143,784	36%	35%		

平成24年度東日本大震災復興支援補助採択状況一覧

平成24年7月5日現在

事業名	要望		採択		採択率		
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額	
24年度(第1次募集)	支援拠点づくり	9	31,363	2	6,000	22%	19%
	被災者に対するカウンセリング、調査活動	9	22,669	2	3,375	22%	15%
	被災地の記録、調査活動	7	20,986	4	11,569	57%	55%
	被災者や被災地域が自ら行う活動	9	44,927	4	10,046	44%	22%
	第1次募集 計	34	119,945	12	30,990	35%	26%
24年度(第2次募集)	被災地域および被災者受入地域における支援拠点、ネットワークづくり活動	9	25,161	4	10,602	44%	42%
	被災地域および被災者受入地域における高齢者、児童、障害者等を対象とした生活支援(メンタルケア、教育支援等)活動	39	106,650	31	80,064	79%	75%
	被災地域の記録活動(後世への伝承、普及・啓発)	5	14,967	3	8,968	60%	60%
	実態調査、現在・将来にわたるニーズ調査活動(普及・啓発)	14	35,793	9	20,043	64%	56%
	被災者や被災地域が行う復興(まちづくり、くらしづくり等)活動	16	41,929	8	21,839	50%	52%
	被災者の自立支援、就業支援を目的とした活動	4	10,761	2	5,211	50%	48%
	第2次募集 計	87	235,261	57	146,727	66%	62%
24年度 計	121	355,206	69	177,717	57%	50%	

東日本大震災復興支援補助



被災地(三陸地方)の地形調査

被災地で無人ヘリコプターによる空撮で地形を調査し、震災後の二次災害が発生する地域を推定。その情報を地方公共団体に提供し、復興計画に役立てていくための取り組みを行っています。
早稲田大学理工学術院総合研究所

被災地への救援物資をスムーズに提供することを目的とした調査活動

被災者や物資支援活動を行っている方からヒアリング調査を行い、被災地への救援物資をスムーズに提供するための活動を行っています。
NPO法人 レスキューストックヤード

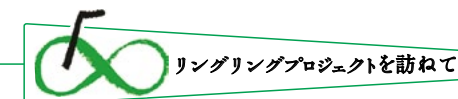


地域の郷土食

「凍みっばなし井」による地域経済活性化

地元特産の大豆、野菜を使用した「凍みっばなし井」の認知向上により、販路拡大及び交流人口の増加による地域振興を行っています。

玉造商工会



補助事業から生まれる 日本ものづくり ネットワーク

(一財)九州産業技術センター

九州産業技術センターは、九州各地に配置しているコーディネーターからの情報や、業界動向調査などの結果から、事業化の見込みが高い戦略分野、対象企業候補を選定。候補となった企業に対して、必要な技術協力ができる大学などの研究機関をマッチングし、研究開発を後押し。さらにハードルが高いと言われる国のプロジェクトなどに応募し、より大きな支援を受けて事業化・製品化の実現までを目指しています。また、初期の研究段階から最終的な実用化まで一貫したフォローアップ体制を作り、長いスパンで企業への支援を行うことや、産学官連系など必要などころに必要な人材を結びつけるハブ的な役割を担っています。

母子の自立支援にも 役立てられている 補助事業

(福)静岡福祉事業協会

静岡福祉事業協会が運営する母子生活支援施設「千代田寮」。こちらの施設では、未婚や離婚などで配偶者がいない、または配偶者とともに生活することが困難など、さまざまな事情で支援を必要とする母親とその児童に居室を提供し、母子の生活支援を行っています。敷地内にある自立訓練棟「ひまわり」では、主に小学生たちが学校から帰寮後、学習のために利用しています。勉強だけでなく必要最低限の生活習慣を身につけてもらうと、自分たちで清掃をしたり、備え付けのキッチンで調理実習なども行ったりしています。また、母親同士の懇親会や子供たちの誕生日会なども開かれ、ボランティアや地域の方々も交えながら、交流の場としても活用されています。



母子支援施設「千代田寮」の敷地内に完成した自立訓練棟「ひまわり」



競輪補助事業の支援を受けて行っている事業から生まれた「KUMADAIマグネシウム合金」(写真左上)
その素材から作られた名刺入れは驚くほど軽い



静岡支部 支部長
田中八郎選手(50期)
補助には条件などがあるのだろうが、建物だけでなく、この先もこの施設がうまく循環して行けるような、そういう長いスパンで見た補助の仕方があっていいのかなと思いました。



福岡支部 支部長
藤田剣次選手(85期)
補助事業と言っても、正直なところ詳しく把握出来ていなかった部分もあるが、立場的にも僕らがきちんと知って、選手たちに伝えるのも大切だと感じました。

財団法人 JKA

〒102-8011 東京都千代田区六番町4番地6 英全ビル



お問い合わせ先

次の問い合わせ先にメールまたはFAXをお願いします。

補助事業部

●機械工業振興補助事業 機械工業振興事業課

FAX / 03-3512-1274

e-mail / kikai25yobo@keirin-autorace.or.jp

●公益事業振興補助事業 公益・福祉振興事業課

FAX / 03-3512-1277

e-mail / koeki25yobo@keirin-autorace.or.jp



日本が生んだ世界のスポーツ



ホームページについて

競輪・オートレースの補助事業について、皆様に、より一層理解していただき、身近なものと感じてくださるよう、補助事業の愛称を「RING!RING!プロジェクト」としています。この「RING!RING!プロジェクト」ホームページ内では、補助事業の申請手続きに関することをお知らせするだけでなく、これまでに実施した補助事業について、その概要や事業成果をわかりやすく公開しています。

<http://ringring-keirin.jp>

